

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02307

研究課題名（和文）メディア文化史における「1970年代」の戦後史位置の再考

研究課題名（英文）Reconsidering Japan's Media and Culture in the 1970s

研究代表者

日高 勝之（Hidaka, Katsuyuki）

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：00388787

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 12,450,000円

研究成果の概要（和文）：1970年代のメディアと文化について、多角的な共同研究を推進した。映画、テレビ、雑誌、音楽、政治、市民運動ほかを分析対象とし、当時を代表する作品、出来事や人物（大島渚、蓮實重彦ほか）に焦点をあてた研究を推進した。研究成果は、研究代表者を編者とし、すべての研究メンバーが執筆した書籍『1970年代文化論』（青弓社、2022年）ほか、数多くの日本語と英語による研究書籍・論文、国内外の研究発表、講演（海外での招待講演含む）などを通して幅広く発信した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

1960年代および1980年代を対象とした研究は活発に行われてきたが、その一方で1970年代は、必ずしも十分に検討されてこなかった。特に1970年代のメディアや文化を包括的に検証する先行研究は乏しい。本研究は、当時の多彩なメディアと文化を検証することで、そうした空白を埋める学術的意義および社会的意義がある。特に、研究成果を総合した書籍『1970年代文化論』（青弓社、2022年）は、1970年代の映画、テレビ、文学、雑誌、音楽、政治、社会運動を包括的に検証した内容であるため、重要な学術的意義と社会的意義がある。また、国内と国外の両方で幅広く研究成果を発信したことに学術的・社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：We conducted a comprehensive study of media and culture in the 1970s. We analyzed films, television programmes, magazines, music, civic movements, and other media, focusing on the representative works on their genres, representations and events of the period. The results of our research were published through the book "The 1970s Cultures in Japan" (Seikyusha 2022) and through numerous research articles and research presentations. Some research presentations were given at the international research conferences.

研究分野：メディア研究、文化社会学、政治コミュニケーション論

キーワード：1970年代 メディア 文化 政治の季節 消費文化 戦後 民主主義 学生運動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

近年、戦後の各時代を批判的に検証する研究が活性化している。とりわけ、1960年代の戦後史位置・役割を批判的に再検証する研究は数多く見られ、代表的なものとして小熊英二『1968(上・下)』(2009)、四方田犬彦・平沢剛編著『1968年文化論』(2010)他が挙げられる。これらは、いずれも1960年代を戦後の文化の転換点と位置づけ、社会学、文化史的な視点から、当時の知的言説の総括や個別の人物論として描写する傾向が顕著である。

また、1980年代に焦点をあてた研究も見られ始めている。(杉田敦編『終焉する昭和1980年代』(2016)、斎藤美奈子・成田龍一『1980年代』(2016)他)。これらの研究は、消費社会が浸透し、パブル文化が開花した1980年代を現在につながる文化的「源流」とする前提から出発している。

こうした1960年代、1980年代の研究にある程度共通しているのは、1960年代を戦後の転換点として捉える視点と、1980年代を60年代の転換の帰結として捉える視点である。だがそれらではその中間に位置する1970年代の10年間に、何がどう通時的に変容したのか、また何がどう残存したのかについての複雑な細部への関心が見過ごされてきた。同時に、多様なメディア・文化領域間の共時的な相互関係・影響についての関心も希薄であった。

一方、戦後をいくつかに分け、時代区分として提示する研究もしばしば行われてきた。例えば大澤真幸は、戦後を3つの区分に分け、戦後から1960年代を「理想の時代」、70年代と80年代を「虚構の時代」、90年代以降を「不可能性の時代」と名付けている。だが、こうした区分は、60年代と70年代を断絶として強調することで、逆に変化のプロセスの細部を見えなくさせる。また、70年代と80年代が一括りにされることで、70年代の固有の性格が十分に検討されなくなる。

2. 研究の目的

本研究は、「1970年代」のメディアと文化を検証し、「高度成長」とその一方で「政治の季節」「前衛」などで特徴づけられる1960年代のメディア文化がいかなる持続と変容を遂げて1980年代以降の大衆消費文化に接続されたのかを解明する。1960年代については、「政治の季節」との関連からメディア・文化表象の政治性、前衛性などを検証する先行研究が数多く存在する。また、1980年代文化についても、60年代と対比的に論じる研究の蓄積が近年見られる。だが、2つの時代の「断絶」の中間に位置する「1970年代」にいかなる変化が具体的に生じたのかはこれまで見落とされてきた。本研究では、「1970年代」に注目し、メディアと文化の変容の細部を比較メディア論的に検証し、メディア文化史の視点から1970年代の再定義、戦後史位置の再考を行った。

3. 研究の方法

本研究は、「1970年代」のメディア、文化が60年代の「政治の季節の残滓」と「高度成長期の跳躍」をどのように拮抗、交錯させながら80年代以降に環流していったかを検証する。その際、(1)個別ジャンルの分析(映画、テレビ、音楽、雑誌、アート、国家イベント、社会運動)と共に、(2)多様な対立軸の横断的分析(商業主義/反商業主義、教養主義/反知性主義、中心/周縁)を行った。

4. 研究成果

研究期間内における継続的かつ広範な研究内容を比較メディア論的に総合し、研究代表者を編者とし、すべての研究メンバーが執筆した書籍『1970年代文化論』(青弓社、2022年)で包括的な研究成果を社会に発信するとともに、その他に数多くの研究論文、国内外での研究発表、各種の講演等(海外の招待講演など含む)を通して研究成果を幅広く発信した。

上述の書籍『1970年代文化論』は、沖縄返還や日中国交正常化などの政治の動き、高度経済成長や第一次石油ショックなどの経済の変容を押さえたうえで、1970年代の映画、テレビ、雑誌、文学、音楽、アート、国家イベント、社会運動を横断的に考察した。その際、「家族・若者・中高年」「政治・性・マイノリティ」「国家・地方・周縁」などに注目しながら予断を排して検証を行った。

本書は、「政治の季節」から消費社会への過渡期という1970年代の単線的な歴史理解を退けて、新自由主義、新左翼、ポストモダン、戦後民主主義などが複雑に交錯した70年代の文化の深淵に迫り、「70年代とは何か」という問いに正面から応答する試みである。序章(みえにくい1970年代(日高勝之))は、1970年代の一筋縄ではいかない複雑さを示しつつ、研究の問題意識を述べた。第1章(「からかい」からみる女性運動と社会運動、若者文化の七〇年代 雑誌「ビックリハウス」におけるウーマン・リップ/フェミニズム言説を通じて(富永京子))は、当時を代表する雑誌が女性運動をどのように受容したのかを丁寧に検証した。第2章(家族とテレビドラマの一九七〇年代 「ホームドラマ」から「反ホームドラマ」への転換とその背

景（米倉 律）は、当時、反ホームドラマが現れたことの背景を、家族の変化やテレビ視聴の個人化などと結びつけて解き明かした。第3章（「司馬史観」への共感とポスト「明治百年」「教養主義の没落」後の中年教養文化（福間良明））は、当時、多くの読者を獲得した司馬遼太郎の文学について、高度経済成長後のビジネスマンの教養の観点から考察を行った。第4章（大島渚と蓮實重彦 反時代・フランス・マゾヒズム（日高勝之））は、当時を代表する映画監督と映画批評家をつなぐ共通項を、連合赤軍事件、三島事件など 政治の季節 の出来事との関係から検証した。第5章（太田竜 ポスト新左翼の「革命」とアイヌ民族運動の胎動（藤巻光浩））は、当時、活発化したアイヌ民族運動をポスト新左翼の代表的な活動家の動向と結びつけて検証した。第6章（東郷健 マイノリティ・ポリティクスとアートの不都合な関係（長崎励朗））は、性的マイノリティの権利を掲げた政治家の当時の社会的受容を、芸能界などとの比較から検証した。第7章（テレビが媒介するナショナルな時空間の編成 NHK『新日本紀行』を中心に（米倉 律））は、当時を代表するテレビ紀行番組の表象のありようを、変化する「故郷」への社会やメディアのまなざしの観点から分析した。第8章（四畳半テレビ CATVとビデオ・アートが夢見た「コミュニティメディア」（飯田豊））は、大阪万博後の時代やテレビの民主化との関係から、地方のCATVの検証を行った。そして、終章（「癒合」の時代 一九七〇年代のリアルと現代性（日高勝之））は、全ての章を整理すると共に、1970年代は、新自由主義、新左翼、ポストモダン、戦後民主主義などが複雑に交錯するメタプロセスが進行した時代であったと述べ、それゆえに、「『癒合』の時代」と形容するのに相応しい時代であったと結論づけた。最後に、1970年代とウィズ/ポスト・コロナの時代の21世紀の現在との関係性について議論した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 富永京子	4. 巻 67(1)
2. 論文標題 『書くこと』による読者共同体の生成メカニズム 若者雑誌『ピククリハウス』の投稿を事例として	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ソシオロジ	6. 最初と最後の頁 99-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 日高勝之	4. 巻 7
2. 論文標題 「終戦」の創られ方と「戦後」の永続化	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都メディア史研究年報	6. 最初と最後の頁 49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富永京子	4. 巻 33
2. 論文標題 「若者文化における政治への関心と冷笑 雑誌『ピククリハウス』を事例として」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 年報社会学論集	6. 最初と最後の頁 99-115
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福間良明	4. 巻 610
2. 論文標題 「コロナ」と「『戦争の語り』：「あたり障りのなさ」が蔓延する戦後75年	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福祉のひろば	6. 最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田豊	4. 巻 7月臨時増刊号
2. 論文標題 ザ・テンプターズからの飛躍 萩原健一の源流	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 40-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田豊	4. 巻 7月号
2. 論文標題 メディアのなかの考現学 アカデミズムとジャーナリズム、エンターテインメントの狭間で	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 135-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 飯田豊	4. 巻 3月臨時増刊号
2. 論文標題 磯崎新のメディア論的思考 マクルーハン、環境芸術、大阪万博	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 227-241
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富永京子	4. 巻 43
2. 論文標題 メタゲームとしての雑誌投稿 デジタルゲーム雑誌『週刊ファミ通』投稿コーナーを事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ソシオロゴス	6. 最初と最後の頁 37-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米倉律	4. 巻 56巻1号
2. 論文標題 『八月ジャーナリズム』の形成 - 終戦期～一九五〇年代におけるラジオ、新聞による戦争関連報道の展開 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 1-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 米倉律	4. 巻 13号
2. 論文標題 『戦争加害』という主題の形成 1970年代におけるテレビの『8月ジャーナリズム』を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジャーナリズム&メディア	6. 最初と最後の頁 209-225
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 日高勝之	4. 巻 4
2. 論文標題 昭和の勤労青年と「まなざし」の快楽～佐藤卓己著『青年の主張 まなざしのメディア史』を読む	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都メディア史研究年報	6. 最初と最後の頁 154 - 173
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤巻光浩	4. 巻 47巻1号
2. 論文標題 レトリカルなメディアとしてのニュークリア・ミュージアム 市場原理万能時代のシティズンシップの行方	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 5 - 23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長崎励朗	4. 巻 44巻1号
2. 論文標題 戦後社会教育実践における排除と包摂の焦点 『月刊社会教育』を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 桃山学院大学総合研究所紀要	6. 最初と最後の頁 169-182
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計17件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 9件)

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Constructing Depoliticized Youth in the late 1970s: The Case of Youth Culture Magazines
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 What is the Role of Mass Media for Activists?: The Process of Forming the Activist Identity under the Gaze of the Media
3. 学会等名 Alternative Futures & Popular Protest (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 環境危機と社会教育：小さな社会運動の背景にあるもの
3. 学会等名 日本社会教育学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 The Process of Forming Activist Identity under Media Coverage: the Perfect Standard, Right Type of Activism, and Gendered Experience “Who Meets the Perfect Standard of a ‘Real’ Feminist?: Writings by Feminist Activists in Japan
3. 学会等名 Mobilization Conference, San Diego. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Constructing Depoliticized Youth in the late 1970s: The Case of Youth Culture Magazines
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies. (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 テレビに映ったのは研究者か、それとも活動家なのか：研究者活動家 (Scholar-Activist) の目を通じたマスメディアと社会運動の「分断」(国際学会報告)
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会2021年度春季大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Katsuyuki Hidaka
2. 発表標題 Negotiating Bizarreness and (De) Politics: February 26 Incident and Abe Sada on Films
3. 学会等名 International Symposium 'Directions in Japanese Film Studies' (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 林田真心子・飯田豊
2. 発表標題 フィルムからENGへ ニュース生産における送り手の文化と慣習を巡る人類学的研究
3. 学会等名 新潟大学地域映像アーカイブ研究センター公開研究会「ビデオの文化資源学」
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 社会運動研究とNPO 研究の差異を考える 社会運動論から考える参加と組織化(2)
3. 学会等名 第21回日本NPO学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 富永京子
2. 発表標題 欧州・東アジアの社会運動と社会運動論の現代的課題
3. 学会等名 アジア経済研究所APLセミナー(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Activists Seeking Authenticity in Social Movements: The Study of Activist Identity and Lifestyle Movement in Japan
3. 学会等名 EVF Discussion Workshop: Youth, Activism and Politics in Japan Today(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 The Study of Activist Identity and Protest Tourism
3. 学会等名 Workshop of Social Movements after the Global Crash: Looking Back, Looking Forward (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Wagamama(selfishness): Barriers to Participation in Social Movement in Japan
3. 学会等名 University of Vienna Public Seminar (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Kyoko Tominaga
2. 発表標題 Collective action by unradicalized youth: Practices of constructing and sharing the activist identity
3. 学会等名 Public Lecture in Friedlich-Alexander Universtat Erlangen-Nurnberg (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 飯田豊
2. 発表標題 ポストメディアの可能態 「メディア研究の終焉」を考える補助線として
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会国際大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 飯田豊
2. 発表標題 メディア研究としての『歴史修正主義とサブカルチャー』
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会理論研究部会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 日高勝之
2. 発表標題 昭和と平成の間～モラトリアムから偶然性まで～
3. 学会等名 日本コミュニケーション学会関西支部秋季大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 日高勝之・福岡良明・飯田豊・富永京子・藤巻光浩・米倉律・長崎励朗	4. 発行年 2022年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 280
3. 書名 1970年代文化論	

1. 著者名 Jennifer Coates, Eyal Ben-Ari, Katsuyuki Hidaka	4. 発行年 2021年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 222
3. 書名 Japanese Visual Media: Politicizing the Screen	

1. 著者名 山崎望編・富永京子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 312
3. 書名 民主主義に未来はあるのか？	

1. 著者名 出口剛司・武田俊輔編・富永京子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 235
3. 書名 『社会の解読力<文化編>』	

1. 著者名 Blai Guarn, Artur Lozano, Dolores Martinez (Katsuyuki Hidaka)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Berghahn Books	5. 総ページ数 208
3. 書名 Persistently Postwar: Media and the Politics of Memory in Japan	

1. 著者名 飯田豊	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 『メディア論の地層 1970大阪万博から2020東京五輪まで』	

1. 著者名 神野由紀・辻泉・飯田豊編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 青弓社	5. 総ページ数 370
3. 書名 趣味とジェンダー 手づくり と 自作 の近代	

1. 著者名 今泉隆裕・大野哲也編(長崎励朗)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 嵯峨野書院	5. 総ページ数 357
3. 書名 スポーツをひらく社会学：歴史・メディア・グローバリゼーション	

1. 著者名 福間良明・佐藤卓己・河崎吉紀・井上義和・福井佑介・松尾理也・白戸健一郎・本田毅彦・赤上裕幸・石田あゆう	4. 発行年 2018年
2. 出版社 創元社	5. 総ページ数 488
3. 書名 近代日本のメディア議員	

1. 著者名 富永京子・高野光平・加島卓・飯田豊・林田新・田中里尚・池上賢・光岡寿郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 192
3. 書名 現代文化への社会学 90年代と「いま」を比較する	

1. 著者名 長崎励朗・南出和余・木島由晶・名部恵一・高井昌史・片平幸・小池誠・鈴木隆史・石田あゆう・佐野明子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 せりか書房	5. 総ページ数 242
3. 書名 メディアの内と外を読み解く	

1. 著者名 藤巻光浩	4. 発行年 2019年
2. 出版社 緑風出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 国境の北と日本人 ポストコロニアルな旅へ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	米倉 律 (Yonekura Ritsu) (20734726)	日本大学・法学部・教授 (32665)	
研究分担者	長崎 励朗 (Nagasaki Reo) (30632773)	桃山学院大学・社会学部・准教授 (34426)	
研究分担者	藤巻 光浩 (Fujimaki Mitsuhiro) (50337523)	フェリス学院大学・文学部・教授 (32711)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	福間 良明 (Fukuma Yoshiaki) (70380144)	立命館大学・産業社会学部・教授 (34315)	
研究分担者	富永 京子 (Tominaga Kyoko) (70750008)	立命館大学・産業社会学部・准教授 (34315)	
研究分担者	飯田 豊 (Iida Yutaka) (90461285)	立命館大学・産業社会学部・教授 (34315)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関